

井上さんの講座から〈2〉

印象に残った

身近なエピソード

生命のバトンタッチ

私は両親と同居しており、父が私の息子の面倒を見ていました。握手をよくしていた息子が言った言葉が心に残っています。「いつかこの家からおじいちゃんがいなくなるんだ。だから僕はこの手の中におじいちゃんを残すんだ」。小学生の頃には、頼りがいがあったのに、中学に入った頃から病気でどんどん弱くなっていく祖父。そのような3世代同居のなかでは日常で死後の意思を伝えることもできませんでした。しかし現在の核家族では、晩年は夫婦の一方が亡くなれば一人で最期を迎えることになりま。葬送にまつわることをあえて言葉として書き残すエンディングノートが必要とされるのです。

死後の「しかけ」を残す

死ぬと未来は作れない。しかし死んでもしかけられるものがあります。ある人は葬儀が終わる悲しみと疲労のなか家に帰ると、亡くなった夫から花束が届きました。生前に娘に託しておいた夫からのメッセージでした。また、友人の子どもに20歳

になるまで毎年誕生日に本が届くというしかけをした人もいます。死後のしかけ、死への準備作業をするので、自分のこだわりを確認することができます。今日生きていることに感謝し、一日一日を大切にすることで、死への恐怖を越え、死ぬ瞬間まで楽しむこともできるのです。

すべての縛りを取り除く

明治民法（1898〜1947）では家をめぐる権利や義務といった「家督」は全て一家の「戸主」（男）のものであると定められました。父からその長男である息子へと「父系男子」で「家」はつながっていきました。結婚も「妻八婚姻」ニヨリテ夫



ノ家二入ル（民法788条）」とされていたのです。

戦後、民法が改正され、この家制度は廃止され、日本国憲法24条によって「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」としています。しかし、墓の継承者がいない状況にあっても「家制度」の亡霊が見え隠れし、男性は墓や相続などのことが声に出しやすく、女性は夫の親の葬儀や墓についても言いにくい現状もあるようです。しかし、すべての縛りを取り除くと、男性にも女性にも、親への思い、自分らしく最期まで生きることに、最期を迎えたいという気持ちはあるのではないのでしょうか。

講座の最後のワークで

最後にエンディングノートの一つとして別れの言葉や、生家の見取り図を実際に書いてみました。短時間の中で、それぞれ自分の正直な気持ちを書けたようです。数名の発表があり、ユーモアを交えた親への感謝、心の中にしまっていた申し訳ない気持ち。娘、息子、夫などの連れ合いへの温かい想い、大切な人へ

井上さんの本

より良く死ぬ日のために

井上 治代 / イーストプレス

葬式や死にまつわるなぜ?をやさしく解説。常識だと思っていたことが実は…。読めば目から鱗が落ちる一冊です。四コマ漫画も必見。(河原)



の別れのメッセージは、どの方の言葉も心温まるもので、心に響きました。強気な私でも実際に書いてみると、夫や子どもたちへの感謝の言葉であふれ、書き残すことの大切さや、何度でも書き直しできることを実感しました。(近藤)

子の世話にならずに死にたい

変貌する親子関係

井上 治代 / 講談社

なぜ子の世話にならずに死にたいのか、どうやら社会的背景や歴史、家族形態の変化などが深く関係しているらしい。頼りたくない頼れない、親の真意は、子に望むものとは…。長年葬送のあり方などの問題を研究・活動されている著者ならではの説得力ある一冊。

